

日本社会医学会

JAPANESE SOCIETY FOR SOCIAL MEDICINE

日本社会医学会 2026-2 号 2026 年 10 月 10 日発行

事務局担当理事 波川京子

学会ホームページ: <http://jssm.umin.jp/>

運営事務局 合同会社ソーテeria (藤本容子) 〒260-8677

千葉市中央区亥鼻 1-8-1 千葉大学医薬系総合研究棟 1-801

TEL & FAX : 043-226-2979 E-mail: jssm@soteria.cc

<特集一第 67 回日本社会医学会総会>

2026 年 8 月 29・30 日に北海道名寄市立大学で第 67 回日本社会医学会総会は盛会に終わりました。各セッションのようすを、おもに座長担当者の報告によってご紹介させていただきます。

特別講演 「北国・名寄の時空を超えて」

鈴木邦輝氏 (元名寄市北国博物館長、天塩川流域研究会代表、なよろ観光ボランティアの会会長、北海道認定アウトドアガイド (自然))

報告者: 九州社会医学研究所 舟越光彦

名寄の歴史と産業、文化を学ぶ貴重な講演だった。名寄は先史時代からオホーツクや大陸を結ぶ交流回廊に位置し、アイヌ民族が豊かな自然の恵みを受けて暮らしていた地である。道央圏から遅れて 20 世紀初頭に和人の入植が本格化し、農林業の基盤が築かれた。1931 年には鉄道が四方に通じ、ヒトとモノが集積する道北の「鉄道の街」として発展した。戦後の 1956 年に市制を施行。減反政策を契機にウルチ米からモチ米生産へ転換し、現在では銘菓「赤福」の原料にも用いられる全国区のブランドへと成長を遂げた。冷戦期には自衛隊駐屯地も設置された。現在は人口減少や商店街の衰退といった課題に直面しているが、地域の財産である名寄市立大学の存在や冬季スポーツ振興を軸としたコンパクトな街づくりが進められている。

初めて名寄を訪れ、山川に囲まれた自然の豊かさに魅了された。多くの課題を抱えつつも、地域の未来を真摯に考える大学生や、保健行政を支える卒業生の頼もしい姿に触れ、持続可能な街の未来へ希望を感じた。

報告者: 評議員、雄武町国民健康保険病院

大野義一朗

鈴木氏は大会会場となった名寄市を知り尽くした名寄市立北国博物館の元館長です。

名寄は北海道の北部内陸を流れる天塩川と支流の合流点にできた広い盆地にあり、多雪かつ寒冷で道内でも過酷な地です。厳しいからこそ美しい自然がスライドで紹介され参加者を魅了しました。

講演で語られた「時空」とは、人間の営みでした。2 万年前の人の痕跡があること。山と川の恵みに支えられたアイヌの時代、「なよろ」もアイヌ語に由来すること。和人が持ち込んだ交易と農耕によるアイヌの社会構造の崩壊。20 世紀になって本格化した東日本各地からの団体入植で農業、林業と原産地地場産業が始まる。生産物はマッチ軸木、レンガ、亜麻、スキー、もち米、製紙工場の隆盛と撤退。人々は社会の変化に翻弄されながらそれまで蓄積したものを足掛かりに道を切り開いてきたことが話されました。

鉄道・道路の整備、自衛隊の駐屯が始まり名寄は北海道北部の行政、物流、医療の拠点になっていきました。女性の生き方を支援する目的で出発した女子職業学校は存続の危機に直面するたびに、誰のための何のための学問かを問い続け、文化・精神的支柱となって名寄市立大学へ繋がっていることが紹介されました。

現在の名寄。人口減少、高齢化に歯止めがかかりません。周辺から名寄の集まっていた人の流れが素通りしていく。それでも名寄以上に過疎化が進む北海道北部地域の医療、社会を支えるために、人口 3 万人弱の小さな町になっても「存在感のある街づくり、地域連携」をあきらめない。それは人口減少高

齡化時代の最先端にいる名寄が社会に貢献する挑戦である、と話されました。

目の前に人の営みがあれば、そこが社会医学の居場所になる、そんなメッセージをもらった特別講演でした。

大会長講演 「なぜ名寄に大学があるのか？」

播本雅津子氏（名寄市立大学保健福祉学部看護学科教授、第 67 回日本社会医学会総会大会長）

報告者：木村美也子

昭和女子大学人間社会学部現代教養学科教授

8 月末、大変過ごしやすい季節に、名寄市において第 67 回日本社会医学会総会が開催され、盛況のうちに幕を閉じました。大会 1 日目の 2026 年 8 月 29 日

（土）には、播本雅津子先生による大会長講演が行われ、「なぜ名寄に大学があるのか？」という、多くの皆様が抱いていた「？」への答えとなる、興味深いお話をうかがうことができました。名寄という土地で、どのように歴史ある大学を守ってこられたのか。教員や地域の皆様が、この地に集う学生たちをいかに温かく迎え、わが子のように見守り、育ててこられたのか。そして、この地で貴重な学生生活を過ごした学生の皆様が、いかなる使命感をもって社会へ旅立って行かれるのか。そうしたお話に触れ、心洗われる思いでした。

AI が人にとって代わるともいわれる現代だからこそ尚更、人の温かさや熱意、信念に支えられたこの地での学びには、他では得がたい価値があるのではないかと痛感した次第です。

シンポジウム 1 「試される大地」の最前線：暮らしの結節点から見る北海道北部のいまー日本社会医学会と道北の地域振興を考える研究会との共催企画ー

1. 道北の社会・経済と地域振興のネットワーク形成

清水池義治氏（北海道大学大学院農学研究院准教授）

2. 地域に寄り添うラストワンマイル：地域密着型コンビニの物流戦略

今野聖士氏（名寄市立大学保健福祉学部教養教育部准教授）

3. 道北のインフラ整備と地域活性化

芳賀寛之氏（旭川開発建設部地域連携課課長）

報告者：総合病院南生協病院 田中勤

このシンポジウムでは、座長の清水義治氏がまず道北とは何か、道北の社会・経済の特徴を解題し、道北ではさらに人口が減っているにもかかわらず、仕事があることで生活水準が維持できていることを指摘。社会イノベーションの好機であり、地域資本の最大化によって暮らしの結節点を守る連携の強化の重要性を示した。今野聖士氏は、地域密着型コンビニの物流戦略を題材に、がんばっているグループの事例を紹介、自前の物流網とその工夫による暮らしを支え、地域社会が循環し持続する仕組みづくりについてエビデンスを示した。さらに、行政からのシンポジストとして芳賀寛之氏は、北海道の価値を生み出す「生産空間」は住み続けることを前提にして、定住環境を維持し、そのための高規格道路など命や生活を守るインフラ整備の重要性についてデータをもとに解説した。このセッションを通して、地域格差の実際を垣間見ることができ、足りないものがあっても、厳しい自然・社会環境にあっても、前向きに取り組めば前進できるという希望と勇気を感じる有意義なセッションとなった。

シンポジウム 2 過疎地の健康と暮らしを守る

1. 島民の「生きる」を支える～島の看護師・保健師の使命感～

飯田希氏（利尻島国保中央病院看護部看護科長）

小松友紀恵氏（利尻町役場こども家庭センター副所長（兼保健指導係長））

2. 小さな中頓別（まち）のしあわせをデザインする

布施彩音氏（中頓別町保健福祉課保健師）

報告者：播本雅津子

名寄市立大学保健福祉学部看護学科教授

利尻町の役場保健師である小松氏からは、町民の健康管理に取り組む意気込みが伝わり、第一次産業に携わるとご長寿の方々の写真も含めて、生き生きと

した暮らしが紹介された。利尻島国保中央病院の看護科長である飯田氏からは、住民の医療を支える看護職の情熱が伝わってきた。通常の看護活動を越えたと思われる実践例からは、専門職が工夫と努力を重ねること、諦めないことが、住民の「生きる」を支えるということが伝わり、感涙を誘う報告であった。

中頓別町保健師の布施氏からは、人口 1400 人、高齢化率 40% の町で取り組んでいる保健福祉活動についての報告があった。妊婦から高齢者まで幅広い年代に対して、住民とともに「暮らしをデザイン」という言葉がぴったりと当てはまる様子が伝わってきた。

この報告により「過疎」「へき地」「離島」という言葉がマイナスに感じないようになった。少子高齢化・人口減少社会に対するマイナスの先入観が覆され、明るい未来が期待できる気持ちになった報告であった。

基調講演「北北海道における地域医療の現状と課題」：名寄市病院事業管理者 和泉裕一氏

報告者：総合病院南生協病院 田中勤

本講演では、北北海道という広大な医療圏において、人々の生命と生活を支えるための、まさに地域医療の最前線のお話を聞くことができた。医療従事者の確保のみならず、名寄市立総合病院の受け入れ態勢を充実させ、医療ネットワークを構築して、現場の絶え間ない努力で救命救急医療を維持しているようすは、ただ感嘆で終わらせていいものではなく、都市部にいる医療保健福祉に従事する者にとっても常に思いを共有していきたいと感じさせられた。たとえば、産科医療についても、高次機能病院への母体搬送は数十分でも緊迫した時間となるのに、北北海道では比較にならないくらい搬送距離・時間が長い。ドクターヘリ、ドクターカーなどの選択や、実際に分娩に対応できる医療施設がそろっているわけではないことに驚かされた。そんな厳しい環境下でも、「ポラリスネットワーク」のごとく、広域の医療ネットワークを構築し、地域医療を守るべく、工夫を続けているということに強い感銘を受け

るとともに、医学・医療の原点をいま一度かみしめさせてくれる機会となった。

一般演題

セッションⅠ 高齢者保健・地域づくり

報告者：高島毛敏雄

日本社会医学会理事長・関西大学名誉教授

第 1 セッションでは 4 つの発表があった。まず、関西大学の王辰越氏が「高齢者の食を通じた見守り活動の現状と課題」として兵庫県過疎地域の A 市 Y 地域の高齢者の「食」を通じた見守り活動の現状の報告があった。続いて四日市看護医療大学の多次淳一郎氏は「地域包括支援センター職員が必要と考える通いの場の終結に関連した支援」のインタビュー調査から終結は地域活動の循環過程の可能性がある」と報告した。同じく四日市看護医療大学の太谷喜美江氏は「都道府県別 5 歳児健診実施率の関連要因」を相関分析に基づき報告をし、市町村別の分析を今後進めると報告した。最後は早稲田大学の廖郁慧氏が「台湾における移動販売と DX を活用した地域づくりに関する研究」について報告をし、台湾の DX を活用した地域支援モデル事業は、日本の過疎地域の地域づくりや住民支援に有用であるのではないかと指摘した。いずれの発表も学生も含めて 20 人以上の視聴者が熱心に聞き活発な討議が行われた。

一般演題

セッションⅡ 困窮者／青少年の支援

報告者：波川京子

大阪歯科大学看護学部特任教授

セッションⅡは、困窮者／青少年の支援をテーマにした 4 題の報告であった。

山中珠美氏の「不可視化された居住困窮の構造的比較研究」では、関東都心部の潜在的住居困難者は都市的匿名性と都市インフラなどの都市空間に埋没し、他地域では家庭内や自家用車などの私的空間に潜在化している報告であった。

田中勤氏は、名古屋市内の深夜の街で思春期世代の声を「深夜の繁華街における対話による保健活動」に集約した。彼らは収入の安定・充実と日常の達成

感を得ていたが、教育・労働・社会環境づくりが課題であるとしている。

米田政葉氏の「北海道の教育系高等教育機関に所属する女子新入学生におけるメンタルヘルスと主観的経済状況の関連」では、48%が抑うつ群にあり、経済的不安に伴う外出の低下、アルバイトによる学習時間の圧迫が抑うつに影響することを示唆した。

真弓昂氏の「学習支援活動に参加する子どもの変化に関する保護者からの評価」では、特定非営利活動団体による学習支援活動は、子どもたちの学力や学習意欲、さらに共同性を向上させるだけでなく、攻撃性の低下など肯定的な可能性を示唆していた。

一般演題

セッションⅢ 産業保健／公害

報告者：埴田和史

びわこリハビリテーション専門職大学教授

301「子育て世代の職場における受援力とその関連要因の検討」

昭和女子大の木村は、小学生以下の子供を持つ親を対象に、職場での支援経験と受援力の関係を調査し、支援を受ける肯定的な経験は受援力向上と関連し、支援不足や相談困難な否定的経験が低下と関連する事を示した。子育て支援に求められる職場環境のあり方を示す貴重な調査と評価される。

302「産業保健活動に対する主観的な有用性評価と従業員の主観的健康感・ワークエンゲージメントとの関連」

早稲田大学の酒井は、民間企業従業員 683 人を対象とした質問紙調査を実施し、産業保健活動を「役に立つ」と感じる従業員ほど健康状態が良く、健康状態が良好なほど高いほどワークエンゲイジメントも高いことを報告した。発表後、民間企業の業種や産業保健スタッフの構成、回答者の年齢構成の偏りについて質問があった。産業保健役割を示す興味深い発表と言える。

303「建設アスベスト給付金制度における石綿肺診断の問題点」

勤医協札幌病院の細川は、2020～2025 年の石綿肺健診を受診者し、建設アスベスト給付金申請に必要な

「石綿肺」の診断書が作成され、認定審査会から決定報告書が交付された 4 例についてその内容を分析し、審査過程の不透明性を指摘した。多くの石綿ばく露労働者の犠牲を踏まえた最高裁判決を契機として確立した建設アスベスト給付金制度が適正に運用されるためにも、審査内容の公開が必要と考えられる。

304「食品公害カネミ油症事件のいま～認定基準と補償内容の在り方について～」

カネミ油症被害者全国連絡会の三苫は、1968 年に発生した本事件の経過を振り返るとともに、現在の認定基準や補償制度の問題点を検証し、未認定患者や二世患者の救済拡大と、被害実態に見合った適正な補償の必要性を訴えた。フロアからは、水俣病や薬害事件などでも認定基準が被害者の切り捨てに利用されているとの指摘があり、被害者救済に向けた社会的取り組みの重要性が改めて確認された。

一般演題

セッションⅣ 労働者の健康

報告者：道端達也 玉島協同病院医長

当セッションでは下記 4 つの演題が発表されいずれも活発な意見交換が行われた。

「中小企業労働者の職種による健康格差 10 年の推移」では、タクシー運転手が技能技術、事務営業、医療介護専門職と比較明らかにメタボリック症候群該当割合が多いことが示された。

「野菜の施設栽培農家における暑さ指数と心拍数による熱中症リスクの評価」では、WBGT と心拍数の関連が示され、心拍数を熱中症発症指標として用いる事の合理性が示された。

「電話リレーサービスオペレーターの筋骨格系症状・精神的負担感の勤務実態」では、手話通訳者の新しい働き方である電話リレーサービスでの労働負担が発表され、頸肩腕障害の「危険自覚症状者」が 3 割おられ、さらなる実態把握と対策が急務であることが示された。

「ノーリフティングケア研修前後における入浴介助中の静的体幹前傾姿勢と回復機会の変化」では、2 名の介護従事者にノーリフティングケア研修をおこな

い1年後に望ましい作業姿勢の割合が増加した変化が示された。

第 67 回日本社会医学学会総会参戦記（編集後記）

広報担当理事、総合病院南生協病院婦人科

田中勤

2026 年 8 月 29 日・30 日の両日、北海道名寄市の名寄市立大学において、本年度の第 67 回日本社会医学学会総会が開催された。大会長の播本雅津子先生からは、「僻地での開催」であることや「交通の便」が大変であることなど、事前に理事会などでお話しがあったため、どれだけ大変なところで開催されるのだろうと、参加者たちはドキドキしながら名寄市に集結した。名寄市に到着してみると、懐かしさを感じさせる風景が広がり、高い建物はほとんどない。日本でも有数の美しい星空で有名な場所であり、いよいよ天の川が観られるかと期待したが、やや曇り、そして満月前後で、残念ながら星を楽しむことはできなかった。ただし、小惑星（35143 Harimoto）という輝く星に出会うことができた（参加できなかった方は調べてみてください）。総会は、名寄市立大学の大量の学生さんが参加し、私の勤める大学の 1 年生もはるばる名古屋から参戦してくれた。なにより発表者・シンポジスト・学生たち若手が熱く語り、若き地上の星たちにめぐりあうことができた。シンポジウムや講演では、へき地医療にける演者たちの熱い想いに心揺さぶられ、ときに涙することもあった。情報交換会では、名寄の名産のもち米による餅つきの実演もあり、次期大会長の木村美也子先生が餅をつき損ねたときは、会場が一瞬ヒヤリとした。それにしても、つきたての餅がこんなにおいしいとは（うちの学生は出来立ての餅 18 個を元気よく食べつくしていた）。最終日の午後には中頓別町へのドライブツアーもあって、シンポジウムでお話しのあった中頓別町保健センターを訪れることもできた。日本社会医学学会総会では毎回感激が得られるが、今回の学会は味わいがまた格別で、「来てよかった！」だけではなく、「帰りたくない！」と、いまだに名寄ロスになっている（筆者は飛行機に乗るのが怖かつ

たので、なんとか理由をつけてサボろうかと考えていたことを自白しておく。実際、出発する名古屋の上空は積乱雲が立ちこめ、旭川上空は巨大な入道雲が突き出ていて恐れおののいた）。

大会長を務められました播本雅津子先生、ありがとうございました。ホスピタリティと医療保健福祉の原点に出会えた大会でした。そして、みなさま、来年は東京で会いましょう(^_-)-☆

★会員からの投稿の募集★

ニュースレターでは、社会医学について思いのある会員の皆さんからの投稿をお持ちしています。テーマは自由です。投稿は事務局までご連絡下さい。

★★日本社会医学学会への入会のお誘い★★

医療・保健・福祉、そして、社会医学に関心を持たれているみなさま、ぜひ本学会に入会して、私たちと一緒に社会医学を学び、歩んでいきませんか？入会資格はみんなの幸せを願うハート一つです。年会費は一般会員 10,000 円、大学院生・学部学生会員 3,000 円となっております。入会希望の方がおられましたら、本学会ホームページをご参照のうえ、お手続きくださいますようお願いいたします。

入会申し込みフォーム：

<https://jssm.umin.jp/appli/index.html>

★★★来年は東京へ！！★★★

第 68 回日本社会医学学会総会のお知らせ(^_-)-☆
2027 年の第 68 回日本社会医学学会総会は 2027 年 9 月に昭和女子大学で開催予定です！！

日時：2027 年 9 月の土日（日程調整中）

会場：昭和女子大学（東京都世田谷区）（予定）

大会長：木村美也子（昭和女子大学人間社会学部現代教養学科教授）

※ 詳細は追ってお知らせしていきます。